

駅前空間の場所を見出す人々 —ストリートミュージシャンのパフォーマンス にみる空間と人の関係—

伊藤 香織¹・小山 朝子²・齋藤 匠³・吉田奈央可⁴

¹ 東京理科大学教授 理工学部建築学科 (〒278-8510 千葉県野田市山崎 2641)

E-mail: kaori@rs.tus.ac.jp

² 株式会社竹中工務店

³ 株式会社アラキササキアーキテクト

⁴ トラスコ中山株式会社

千葉県柏市の JR 柏駅前デッキでは、ストリートミュージシャン登録制度により、多くのパフォーマンスが行われている。演者たちは、ステージや練習場所として駅前デッキの空間をたくみに読み解き、使い分けている。すなわち、自らの求める社会や環境との関係（多くの観客を集めたい、親密な空間を作りたい、人目に触れたくない、荷物を守って安心感を得たい、通行の邪魔をしたくない、など）に適合する空間の性質（閉じた/開かれた、可視/不可視、面積やボリューム、通行量とそこまでの距離、音響、気温・風速・日射など）を見つけ出して、場を占めている。パフォーマンスは滞留行動の極端なかたちではあるが、演者の行動観察とインタビューから、物的要素の組み合わせによって生じる空間の性質と人の求める居心地との関係を探る。

Key Words: station square, space, street musicians, comfort, functions

1. 公共空間での滞留

ヤン・ゲール¹⁾が「座るのに適した場所の一般的条件は、快適な局所気候を備えていること、背後を保護されたエッジに位置していること、よい眺めがあること、騒音が少なく会話が可能なこと、空気が汚れていないことであった」と記しているように、人間がまちなかで留まりやすかったり、座りやすかったりする場所には、特徴がある。こうした滞留しやすい快適な場所は、実際の滞留行為の観察から推察することができ、日本でも、街路²⁾、地下街³⁾、駅周辺広場⁴⁾など、様々なタイプの公共空間での滞留の起こりやすさに関する調査研究が見られる。

快適な空間についてもう一步踏み込むと、単に居心地が良いというだけでなく、「やりたいこと」のニーズにうまく応えてくれる空間と考えることもできる。道路、水辺、公園などの公共空間利活用が見直され始めている現在、「やりたいこと」があって、公共空間を使うアイデアを持っている人たちは、いきいきとした都市空間のための重要なプレイヤーとなりうる。

たとえば、サンフランシスコのマーケットストリートでは、プロトタイピング・フェスティバルが実施され、歩道の車道側を中心に、様々な使い方を想定したプロトタイプが市民から提案され、試作され、暫定設置された。プロトタイピング・フェスティバルと議論などを経て、その後はリビング・イノベーション・ゾーンとして社会実装され始めている。このように、空間の使い方をより積極的に見出し、実際のアーバンデザインに帰着させていこうとする取り組みも見られるようになってきている。

2. 空間要素に見出す機能

公共空間には、多様な人々による多様な活動を受け入れ、無理なく共存させていくことが求められている。ひとつの機能に特化した施設であればその機能に適した空間づくりをしていけば良いが、多様な活動を受け入れる場合に想定するすべての活動のそれぞれに応じた空間要素を用意するのでは、公共空間としてのフレキシビリティが失われてしまう。そこで、時と場合によって、あるいは使う人のニーズによって、多様な意味を持ったり、

多様な使い方を許容するような空間や空間要素の考え方が必要になってくる。

本来機能とは異なる機能がユーザによって意識的・無意識的に見出されることもそのひとつであり、典型的かつ基礎的な例は、セカンダリー・シーティングである。まちは、ベンチや椅子など座るために設計された快適なプライマリー・シーティングと、階段、車止め、噴水の淵などもともと座るために設計されたものではないが座ることのできるセカンダリー・シーティングがあるとされている。大人や高齢者はプライマリー・シーティングを選ぶ傾向があるが、子どもや若者はどこにでも何にでも座るので、セカンダリー・シーティングをよく使っているのは子どもや若者だとも言われる^リ。

ストリートファニチャーにも、その形状・高さ・置かれた場所に対して人の取りやすい姿勢や起こしやすい行為^ヲがある。そのため、ストリートファニチャーをはじめとする空間要素をデザインする際には、そうした人の性質を踏まえる必要がある。

著者の担当した大学3年生の演習授業で、まちの中で本来機能とは異なる使いこなしを観察してきた学生は、高さ1100mmの柵の幅100mmの笠木をカウンターに見立ててビールを飲む人や、地下通路出入口上屋の構造物を休憩、飲酒、喫煙などに使う人たちが取り囲んでいる様子などを観察している。

3. 柏駅前デッキのストリートミュージシャンの事例

人々は、このように意識的・無意識的に環境の中に居やすさや使いやすさを読み取り、そこに身を置いている。より積極的に環境のもつ機能を見出し活用している例と

して、ここでは、JR 柏駅前デッキのストリートミュージシャンの調査分析⁹⁾を紹介する。

千葉県柏市の JR 柏駅東口駅前デッキでは、2005 年から「柏ストリートミュージシャン登録制度」が導入されている。登録したストリートミュージシャンは、使用機材、演奏場所、活動時間、歩行者通行への配慮、原状回復、販売行為等に関する「柏ルール」の範囲内で自由に活動することが認められている。近年は「柏ルール」で、新型コロナウイルス感染症対策についても定められており、公共空間での認識を共有したうえで、できるだけ自由な活動を支えようとする方針が窺われる。

2018年6月～9月に、JR 柏駅東口駅前デッキで活動しているストリートミュージシャン（演者）の観察調査及び聞き取り調査を行い、加えて、主要動線通行量のカウンタ調査を行った（表-1）。観察調査では、活動の場所、内容、時間、姿勢、周辺の空間要素の使い方等を観察した。聞き取り調査では、活動の目的、活動歴、場所選択時の歩行者に対する意識、空間要素に対する意識等について聞き取りした。

調査期間中に、活動場所 22 カ所で 75 人の演者の活動が観察された（図-1）。おおよそすべての日に活動が行われていた場所（A, L, J, V）もあれば、1組のみの活動が行われていた場所（B, F など）もあった。聞き取り調査による活動の概要を図-2 に示す。活動内容によ

表-1 調査概要

	調査日		時間帯	調査数
	金曜日	土曜日		
観察調査		6月23日,	17:00 -23:00	75件
聞き取り調査	8月10日, 17日	7月7日, 8月11日, 18日		
カウント調査	9月7日	9月8日		

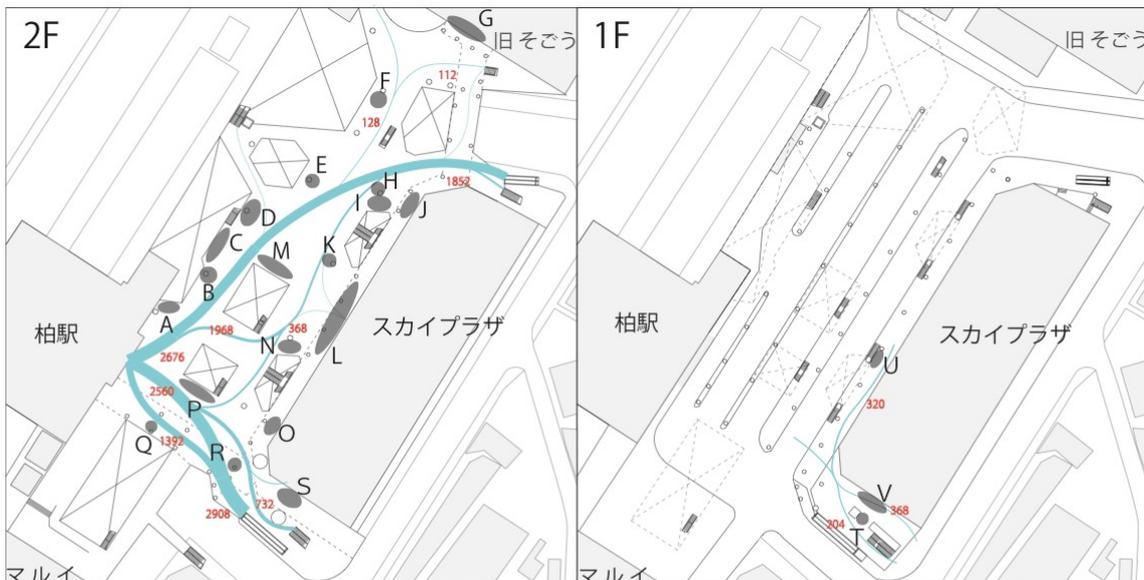


図-1 演者の活動場所

て、必要な機材等や、音響や反射など環境に期待する効果が異なる。また、活動目的によって、人目に触れたいか触れたくないかが異なる傾向にある。

活動場所から最も近い主要歩行者動線までの距離とその通行量をグラフにしたのが、図-3 である。広報を目的とする活動では、通行量の多い歩行者動線に近い場所が選ばれる傾向がある。他方、練習を目的とする活動では、通行量の少ない場所や主要歩行者動線までの距離が長い場所が選ばれる傾向がある。

壁、柱、屋根、手摺などの空間要素と、演者がそれらに期待する機能を図4に整理した。屋根と手摺のいずれも音の反響が期待されているように、異なる空間要素に対して同じ機能が期待されていることがある。一方、手摺が風よけや盗難防止等を期待されているように、一つの空間要素に複数の異なる機能が期待されていることもある。演者が、駅前デッキにある様々な空間要素に、本来機能とは異なる多様な機能を見出し、巧みに使いこなしていることがわかる。

図-3のLでは、通行量が少ない場所にもかかわらず、広報を目的とした活動が見られた。聞き取りから、この演者には常連客がおり、人目を集めることよりも屋根に音の反響を期待しているためだということがわかった。同様に、JやMは比較的通行量が多い場所にもかかわらず、練習を目的とした活動が見られた。Jで活動してい

た演者は、正面の柱に通行人からの視界を遮る機能を期待しており、Mで活動していた演者は、活動内容がダンスであるため、広い空間を必要とし、背後の手摺に盗難防止の機能とビデオ撮影に際して通行人が映らないよう背後を塞ぐ機能を期待していた。このように、通行量と空間要素の両方を、意識的・無意識的に考慮して、自分たちの「やりたいこと」のニーズにうまく応えてくれる空間を見出していると言える。

こうしたストリートミュージシャンのパフォーマンスは滞留行動の極端なかたちではあるが、空間要素のもちうる多様な機能の発見とより積極的な快適性の追求の表れとして、公共空間のデザインに関して示唆するところが少なくないと考えられる。

参考文献

- 1) ヤン・ゲール（著）、北原理雄（訳）、人間の街：公共空間のデザイン、鹿島出版会、2014。
- 2) 小久保貴文、大森峰輝、野田宏治、小林正、街路空間における来街者の滞留行動に関する研究、豊田工業高等専門学校研究紀要 46, 55-60, 2014。
- 3) 松本直司、船曳悦子、地下街における歩行者の停留・滞留行動と空間条件との関係、日本建築学会計画系論文集 76, 660, 321-326, 2011。
- 4) 船曳悦子、松本直司、廣澤克典、大橋怜、利用者の密度分布にみる駅周辺広場における停留・滞留特性 82, 739, 2257-2266, 2017。
- 5) 木内洸雲、橋本都子、居場所の選択とその「きっかけ」に関する研究：都市のパブリックスペースにおける行動観察および実験から、人間・環境学会誌 16(2), 1-10, 2014。
- 6) 小山朝子、齋藤匠、伊藤香織、BURGESS Andrew, ストリートパフォーマーにより見出される公共空間の特性、2019年日本建築学会学術講演梗概集、都市計画、263-264, 2019。

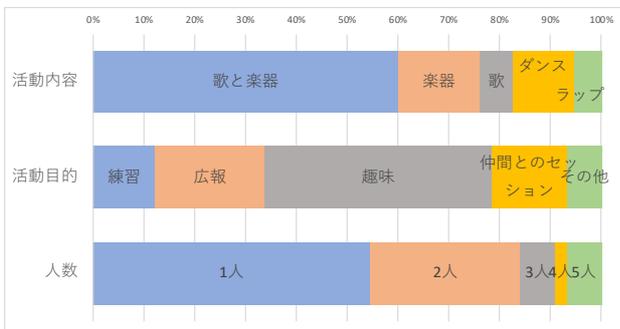


図-2 活動の概要

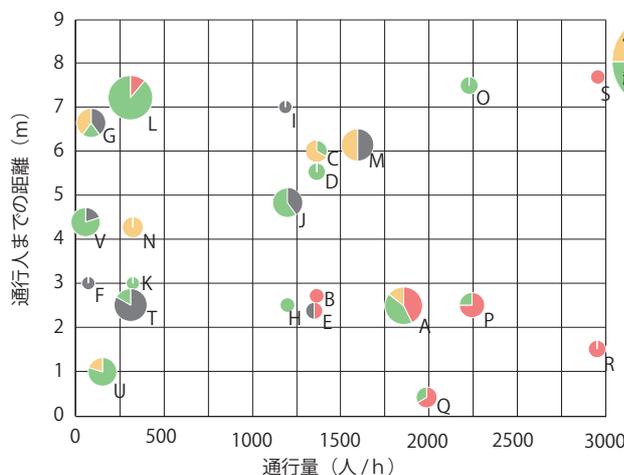


図-3 歩行者通行と活動目的

期待する機能	空間要素											
	壁			柱		屋根	ガラスの手摺	照明	サイン	段差	SP	フェンス
	正面	背後	側面	正面	背後					空間幅		
音の反響	1	12				15	7		1			1
風よけ		4					6					3
盗難防止		4			1		4		1			
背後を防ぐ		5			6		5		4			3
広い												10
明るい								4	3			
座れる											6	
視線を遮る				3								
荷物をかける												3
荷物を置く											2	

図-4 空間要素に期待する機能